

特集 認知症研究の最近の進歩 3学会それぞれの立場から認知症を極める

認知症研究の最近の進歩 3学会それぞれの立場から認知症を極める

前田 潔

これを書いている平成22年9月20日の敬老の日の新聞には、65歳以上人口が総人口の23%に達し、その数はほぼ3000万人になったと報じている。我が国における最近の正確な調査はないが、介護保険のデータから認知症患者は3000万人の、多く見積もって10%、少なく見積もっても7%、すなわち200万から300万人になると推測される。

認知症に関連する問題は数多くあるが、大きな問題は(1)その患者数の多さ、(2)介護、医療の人的、経済的負担の大きさ、(3)病因の解明、有効な治療法の開発が進んでいないこと、などである。

本シンポジウムでは日本老年精神医学会、日本認知症学会、日本神経精神医学会の、認知症に関連する3学会が共同で認知症研究について、トピックスを学会員に紹介することを目的としたものである。

まず最初に神戸学院大の前田潔は、気分障害と認知症の関連について報告した。気分障害と認知症の関係は昔は仮性認知症という形で関連が知られていたが、最近になって気分障害が認知症発症の危険因子であると考えられるようになってきた。両者の関係について自験データを使って報告した。

順天堂大の新井は、我が国でおそらく最初の若年性認知症外来の経験から若年性認知症にみられる晩発性の認知症とは異なる問題点を整理して提示した。若年性アルツハイマー病はアルツハイマ

ー病の中で最も本質的な病態であるとの印象を述べた。

東京大学の岩坪は、最近のアルツハイマー病の分子病態とそれに基づく治療法開発のための診断マーカーについて発表した。岩坪はJapanese Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative (J-ADNI)を推進する責任者であり、J-ADNIの進捗状況についても報告した。最近の情報では軽度認知障害MCIの登録が進んでいないという。

筑波大の新井は、前頭側頭型認知症(FTLD)の病理学的な亜型分類に資するFTLD-U(タウ陰性ユビキチン陽性)から同定されたTDP-43の異常とFTLDあるいは他の変性疾患との病因的関連について話した。

神戸大学の山本は、軽度認知障害をテーマに研究の最近の進歩を概説するとともに、J-ADNI研究に参加して少数であるが自験例について紹介した。少数例のために結論を得ることは困難であるが、少数例の段階でも多くの興味深い知見が得られており、最終的に多数例での結果がまたれると結論した。

当日は初日の午前のセッションの最初であったにもかかわらず多数の学会員の参加があり、討論も熱心に行われ、認知症に対する関心の大きさがうかがわれた。5人の演者がそれぞれ現在のトピックスについて興味深い講演を行った。老年精神医学会は会員の多くが精神科医であり、認知症学

第106回日本精神神経学会総会=会期：2010年5月20~22日、会場：広島国際会議場・アステールプラザ

総会基本テーマ：求められる精神医学の将来ビジョン：多様な領域の連携と統合

シンポジウム 認知症研究の最近の進歩 3学会それぞれの立場から認知症を極める 座長：前田 潔(神戸学院大学総合リハビリテーション学部)、森 啓(大阪市立大学大学院医学研究科脳神経科学) コーディネーター：前田 潔

会の会員は基礎研究者，精神科医，神経内科医がそれぞれ1/3程度の構成になっている。神経精神医学会は脳疾患，身体疾患の精神障害を研究の対象とする学会で，多くが精神科医である。この3

学会に共通するものとして認知症がある。それぞれの研究戦略，方法論は異なるがこのようにひとつの学会で意見の交換を図るということは貴重な経験であった。
